

安溪遊地さま

最近書いたものを送ります。鹿川調査の経緯というか顛末というか送っていただいた『廃村続出の時代を生きる』を遅ればせながら読んでいて詳しく知ったのでというのが大きな理由ですが、安溪さんがエスノアーキオロジーを当初相当意識していたのと同じように私は伊谷さんの期待もあったのですが私もエスノアーキオロジーをズッと考えてきました。琵琶湖博物館を退職したのは2019年ですが退職のとき研究の終焉を記念して作ったのが『ほろ酔いの村』です。この著作と別刷り「ドメスティケーションの背景としての民俗自然誌的技術」や「古代東アジアの馬文化と植生」は私なりの伊谷さんの期待へ応答というものです。

鹿川のエスノアーキオロジー的民族誌はおそらく八重山諸島の近現代史を中心とした人びとの歴史的世界へ外挿すべきものとして安溪さんは後ほど思うようになったと思いますが、伊谷さんはおそらく人類史のどこかに外挿できるはずだと思っていたにちがいないと私は思っております。トングウェなどでの山の中の生活遺跡のことをいつも喋っていたし将来誰か掘ってくれと願っていたと思います。同時に門下生の行ったアフリカ調査のモノグラフも人類史の初期に外挿できると確信していたのは彼の有名な「人間平等起原論」をみれば明らかだと思います。

そんなことを昔を思い出しながらフトと思い起こしました。それ以外のものは伊谷さんから影響を受けた俳諧・俳句の雑論と最近のエッセー集です。まあ、おヒマなおりにでもパラパラ読んでいただければ幸いです。

それにしても安溪さんのエッセーを読んでいた幼児期の「憤怒癡癲」を起こすような激しい気性があったとはね、思いもよらなかった。また私が癩癰をおこして安溪さんが書いたようなことを口走ったなんてまったく記憶にないんだよね。私の最初の沖縄体験のことは「比嘉政夫教授を語る」の特集の『がじゅまる通信』に書いたとおりで、私にとっての沖縄は、あの鹿川の亜熱帯林の樹間からみえるどこまでも碧い海（その後私は篠原鳳作の「しんしんと肺碧きまでの海の旅」だったかな、この句でいつも思い出すが）とそこで展開したであろう「美しき」生活を想像させてくれたこの調査なのですが、この類いまれな経験をさせてくれた伊谷さんと安溪さんに感謝以外には言葉がないので、安溪さんにそのような無礼を働いたとはね、遅いけど謝っておきます。 篠原